



転生したら、 なんか頼られるんですが 1

ALPHA POLIS

猫月晴

Nekozuki Haru

アルファライト文庫 

登場人物紹介

ゼルンド

エルエルの父。
いつもお頂面だが実は親バカ。
いつもお頂面だが実は親バカ。
剣聖けんせいの異名を持つ。

ウォン

魔の森で出会ったドラゴン。
怪我けがをしているところを助け、
仲良くなる。

ルシア

エルの同級生で
アドラード王国の第一王子。
キラキラオーラ満載のプリンス。

ルフエンド

エルの兄。
ちょっぴりヘタレだけど
心優しいお兄ちゃん。

アーネヴィ

エルの母。
普段はすごく優しいけれど
怒らせると一番怖い……?

セイリンゼ

エルの姉。
勝気はげで頼りになるお姉ちゃん。
魔法が得意。

5歳

エルティード(エル)

本作の主人公で元・社畜社員。
常識外れな能力で
いつもやりすぎてしまうのが悩み。
魔法学校に通うため、成長魔法で
10歳の姿になることも……

10歳

「江崎墨よ、起きるのじゃ」

どこか遠くのほうで、少女のような声が俺、江崎墨の名前を呼んでいる。知り合いの中に、こんな声の人はいないはずだ。一体誰だろう。

「江崎墨！ 起きろ！ 起きろと言っておろう！」

名前を呼ばれているということは、俺のことを知っている誰かなんだろうが……

この声には全く聞き覚えがない。声の主はご立腹のようなので起きようとするが、ふわとした心地いい微睡の中から抜け出せない。

「……さつさと起きぬかーッ！」

「痛っ！」

突如として鋭い痛みを感じ、思わず頬を押さえる。肌が熱を持っているのが分かる。どうやら思いきり引っ叩かれたらしい。

目の前には白髪を腰まで伸ばした少女が仁王立ちしていた。長い睫毛、真っ白な肌、赤

プロローグ

い唇。造形がこの世のものとは思えないほどに整っていて、恐ろしくくらいだ。三次元は二次元に勝てないとかいうが、その二次元にすら勝てると思うほど綺麗で可愛い。

「……誰？ ていうかどこ？」

俺と少女の周りには、何も無い不思議な空間が広がっている。

「お前は死んだ。分かったか？」

「……はい？」

お前は死んだ、って、今俺はここにいるじゃないか。どこか知らんけど。

わけの分からないうちの連続で頭が混乱しているのか、目は覚めたはずなのにふわふわした感覚が続いている。まるで夢の中みたいなの。

「そうか、夢か」

「違うーう！ これを見ろ！」

少女がヒョイツと指を動かすと、俺の脳裏に映像が流れ込んできた。最初は粗くて何が映っているのか分からなかったが、徐々に映像がはっきりしてくる。

「う、うお、え……」

口を押さえ、吐きそうになるのを堪える。コンクリートの地面には真っ赤な血。トラックの白い車体にも赤い血がべつとりと付着している。その赤の中心で転がっているのは……ぐちゃぐちゃに潰れた俺の姿。

「す、すまん！ その場面を見せるつもりはなかったんじゃ……」
いつも通る交差点で、俺は死んだ。

「あー……疲れた」

重い体を無理やり動かしてまた一歩進む。時刻は深夜二時すぎ。道は真っ暗で、人はおろか車すらほとんど通らない。

ひたすら努力して、やっとの思いで受かった憧れの会社。インターンシップで、社員の人たちが生き生きと働く様子が胸が高鳴り、それが決め手となって面接を受けることにしたのだ。この会社で働きたいと思った。

でもいざ入社してみたらとんだブラック企業だったなんて。よくある話だけどシロクだった。

残業なんて当たり前前、休みなんて月に一度あるかないかだ。

会社に寝泊まりして携帯栄養補助食品でカロリーを摂取する日々。エナジードリンクなんか飲んでも、疲れも眠気も取れやしない。

もういつそ退職してやろうか。でも今俺が抜けたら、同じように働いている同僚たちに迷惑をかけてしまう。この案件が終わったら辞める、何回そう思ったことか。

結局すぐに次の案件に取りかからなければならなくて、辞めることなんてできない。そ

の繰り返しだ。

「……一旦やめ！」

今日は二か月ぶりに家に帰れるんだ。嫌なことばかり考えるのはよそう。信号が青になったのをしっかりと確認して、横断歩道を渡る。

その瞬間、静かな夜道にクラクションの大きな音が響いた。視界に眩しい光が飛び込んできて思わず目を瞑る。

車だ。そう認識すると同時に、全身に激痛が走った。一拍遅れて衝撃。骨がギシギシと悲鳴を上げている。ああ、肋骨は完全にいつた気がするな。

ほんやりとした意識の中で車のドアを開ける音と、男の焦った声が聞こえる。

車と歩行者の事故って、車側の過失割合が高くなりやすいんだっけ。俺なんかを轢いたせいでお気の毒に。

救急車のサイレンが聞こえるのとほぼ同時に、俺の意識はなくなったんだ。

「そうか。俺、死んだのか」

不思議とすんなり受け入れられた。

今こうして話せているせいとか、あまり実感は湧かない。まあ俺がいなくなっても世界はほとんど変わらないだろう。心残りなのは両親より先に死んでしまったこと……あれだな、家のパソコンの履歴やらデータやらを消せなかったことだ。ほとんど使ってなかった

から、問題ないと言えば問題ない。気になりはするけど。

「そんなお前に、わしからのプレゼントじゃ」

「いやちよつと待て。まだ質問に答えてもらってない」

お前は誰で、ここはどこなのか。一番重要なことをまだ教えてもらっていないんだが。

「お前が起きなかつたせいでもう時間がないじゃ。黙って聞け」

「時間ってなんの時間なんだ……？」

「いいから黙って聞けえい！一言で言うとお前は転生する！」

「……へ？」

よく漫画とかラノベとかである転生と、同じ意味ってことでオケ？

「そうじゃそうじゃ。それで合つとる」

今さらつと心を読まれた気がするんだが。本気で何者なんだよ。

「お前が転生するのは地球とは別次元に存在する惑星じゃ。その名はルベル」

スルーするんじゃない。心読めるなら答えろよ！

「地球と似たような環境なんじゃが、少しずつ違うところがあつてな。まあ簡単に言うくと、魔法が発展し、科学が発展しなかつた地球みたいなもんじゃ。文明レベルは——平均すると地球の中世後期といったところか。魔法がある分、それよりはもう少し上やもしれんな」

少女はそのまま無視して話し続けるので、もう諦めて黙って聞くことにした。どうやら転生するというのは本当みだいだ。具体的に説明されて信憑性が出てきた。魔法というワードは少し、いやかなり気になるが、文明レベルが低いのはいただけいな。現代っ子の俺としてはあまり気が進まない。

「お前が転生する地域は、地球でいう西洋のような文化を持っているみたいじゃな。さしずめ中世ヨーロッパといったところか」

驚きすぎて逆に冷静になっていたけど、なんで俺なんだろうか。

特に秀でた部分があるわけではないし、徳を積んだわけでもない。と自分では思っている。

待てよ……他人から見たら違う可能性もあるかもしれない……いや、やっぱりないな。

「ほれ、魔法ってお前たちの世界の憧れじゃろ？ もっと喜ばんか。魔法がある分、魔物なども発生するが……まあそこは危険がないようにしておこう。生まれは安全性と生活レベル、お前の性格を考慮して、貴族の次男程度かの……」

どうせ転生するなら、学生時代親友だったあいつとか。優しかったし、顔も頭もよかった。おまけにスタイルまでよかった。懐かしいな、全然顔思い出せないけど。

「これで金銭面で困ることもないな。念のため、いざとなったら自分で生活できる程度の能力を与えておくか……あ、通貨はもちろん日本と同じ単位ではないぞ。一応説明しておくが基本的には、金貨、銀貨、銅貨があつて、それぞれ何枚というように数えることが多いな」

他にもあいつとか、あいつとか——

「お前、わしの話を聞いておつたか？」

「……もちろん聞いてましたよ？ パツチリです」

「怪しいの。まあいい、どうせ赤子からやり直すのじゃ。それはそうと、何か希望はあるか？」

学生時代は楽しかったな。地獄が始まったのは社会人になってからだだった。なんでブラック企業なんか就職してしまったのか。見抜けなかった俺のバカ。

「本当に聞いているか？」

「聞いてますよ、聞いてます」

「で、何か希望はあるか？」

いやー、それにしてもよく耐えた俺。

あの生活で過労死しなかったのは本当にすごいと思う。結局交通事故で死んだけど。

「何か希望はあるか!!」

「え？」

「もういい!! 適当じゃー!」

少女が手を振ると、轆かれたときとは違う心地いい光にいきなり包まれた。

「ナニコレ？」

この子が何か話してたのは知ってたけど、色々思い出して聞いていなかった。

いや死んだというショックで変なスイッチが入っただけで、普段は人の話ちゃんと聞いてるよ？

適当に相槌打つとか断じてないぞ？

「では行ってこい!!」

「あ、結局あなたは誰で、ここは——」

最後の言葉は光に呑み込まれて消えていった。

「……行ったな」

江崎星の魂が地球の輪廻から外れ、ルベルの輪廻へと移動したのを確認する。

「……お前には少しばかり、頑張ってもらわねばならぬ」

少女の指先が砂のように崩れ、別の形となった。

「残酷だな、この世界は」



「あなたはエル。エルティード・レシス・アドストラムよ」

覚えている限り、最初に聞いた言葉はそれだった。まだ視界はハッキリとしなくて顔は見えなかったけれど、あれは多分母様だろう。ほんやりと茶色が見えたからだ。母様の髪は緩くウェーブのかかった天然パーマで、深い栗色をしている。

「エルティード、生まれてきてくれてありがとう」

二番目に聞いた言葉はそれだ。落ち着いた、威厳のある声。こっちは多分父様だ。ほんやりと金色が見えた気がする。髪が短いからか、母様ほどはつきりと色が見えなかった。

「この子が、エルティード？　ぼくの弟？」

「わたしの、おとうと？」

この声は多分兄様と姉様。姉様はまだ小さかったからか、呂律が回っていない喋り方だった。

「私の可愛いエルティード、どうか元気に育ってね」

母様の優しい声が鼓膜に響く。

これがこの世界での、一番最初の記憶だ。

真つ白な壁、天井にはシャンデリア。家具はどれも装飾が施されていて、見るからに高そうだ。全く知らないはずなのに、この部屋のことを確かに知っている。

「エル様、どうかされましたか？」

深いグリーン色の瞳と目が合った。亜麻色の髪を纏め、黒と白を基調としたメイド服を身に着けている。この女性のこと知らないはずなのに、知っている。

「そういうえは、今俺は何を……そうだ、着替えをしていたんだっけ……ん？」

「うおわあああああ!!」

何も纏っていない上半身を腕で隠し、勢いよくあとずさる。なんで俺、人に着替えを手伝ってもらってるんだ!?

「エル様!？」

さつきは特に気に留めなかったが、彼女の口から発せられているのは明らかに日本語ではない。でも何故か違和感がなく、まるで母国語のように理解できる。

容姿も日本人のものではないが、それにも何故か違和感を感じない。

『お前が転生するのは地球とは別次元に存在する惑星じゃ。その名はルベル』

「……?」

聞き覚えのない言葉が脳裏をよぎる。それと同時に視界がぐにやりと歪み、映像が走馬灯のように頭へと流れ込んできた。

あまりの情報量に、視界が一瞬ブラックアウトした。ふらついたところを、彼女に支えられる。

「本当にどうなさったんですか!? 大丈夫ですか!？」

彼女はひどく心配そうな顔でこちらを覗き込んでいる。

「旦那様をお呼びいたしましょうか?」

「あ、えつと……」

色々なことが一気に起こりすぎて、頭がパンクしそうだ。ああ、また眩暈が……さつきとは反対に視界が白く染まり、意識が遠のいていく。

「エル様——!？」

遠くで『僕』を呼ぶ声が聞こえた。

「はっ……!」

勢いよく起き上がると、かけられていたふかふかの布団が床へと落ちた。さつきまでと同じ部屋だ。あのあと誰かが寝かせてくれたらしい。服もちゃんと着せられていた。

脳が休まったせいとか、一気に流れ込んできた情報でごちゃごちゃになっていた頭の中は、すつきりと片付いている。まあそうなれば嫌でも分かるよな。

どうやらあの白髪の少女の言うとおり、俺は転生したらしい。自分の手を眺めてみる。小さくてふっくらした子供の手の平だ。壁にかかっている鏡には、白い髪をした子供が映っていた。キョトンとした顔で、紫色の目がちちらを見返している。そしてコテン、と小さな頭を傾げてみせた。

幼いながらも比較的整った顔立ちであることが分かる。大きく丸い目、そしてそれをふちどる長い睫毛。ツンと小さく高い鼻に、桜色の薄い唇。

それらが陶器のように白くなめらかな肌にバランスよく配置されている。

「……うそだろ」

確かに『俺』は江崎屋で、二十六歳。普通のサラリーマンだった。その『俺』は死んで、あの謎の少女によってこの少年に生まれ変わった、と。それはそうとして。今は俺のこと、つまり前世のことは置いておいて、現在のことを把握するのが先決だ。

さつき頭に流れ込んできた情報、今までの『僕』の記憶によると、『僕』はエルティード・レシス・アド……えっと、アドストラム。現在三歳。確か辺境伯家の次男だったはずだ。

それで、さつきの女性はラディア。よく『僕』の世話をしてきているメイド。



『俺』、江崎皇としての記憶、意識ははっきりある。対して『僕』、エルティードの記憶はどこか曖昧で、他人事のようなのだ。一人称が『俺』になっているということは、意識のほとんどは『俺』が占めているのだろう。あくまで人格は『僕』であるエルティードが元となっているが、『俺』江崎皇の記憶の情報量の多さからか、そっちに意識が引つ張られているように感じる。

もしかしてただ『俺』の自我が強いだけなのか？

冷静に考えてみると、人を転生させられるとか、あの子は一体何者なんだ？

やはり神様だろうか。どこか神々しい雰囲気を放っていたような気がしないでもない。

いや、やっぱしない。あのときは驚きすぎて、脳が情報をシャットアウトしてたからな。

魔法が存在するということが、日本より文明レベルが低いということ。それくらいしか覚えていない……いや、正直に言うって聞いていなかったというほうが正しい。

それにしても、魔法ってどんなものなんだろう。やっぱり、ファイアボール！ とかそんな感じなのか？ そんなことをしている場合じゃないと分かっているが、こんなに面白そうなことを試さないわけにはいかない。

「……ファイアボール！」

部屋に俺の声が響いただけで、特に何も起こらなかった。ものすごく恥ずかしい。シーン、という効果音が聞こえた気がする。どうやらこれでは魔法は発動しないらしい。

でも俺は諦めない。なんと少しでも魔法を使ってみたい。

『僕』の記憶を辿ってみるが、特に役に立ちそうな情報はなかった。当然魔法を使ったこともないようで、なんの参考にもならない。自分で考えるしかないらしい。

さつきは何も考えずに魔法名を唱えてみただけだったが、今度はイメージしてみたらどうだろう。

頭の中に、燃え上がる炎の球を思い浮かべる。今度こそ成功しますように！ さもないと恥ずかしいから！

「——ファイアボール！」

何かが体の中を流れる感覚と同時に、目の前に思い描いたとおりのものが生まれた。手をそっと近付けてみると、当たり前だが確かに熱い。

「よっし!!」

今度は成功だ！ もう一度恥ずかしい思いをせずに済んでよかった。

一体どういう仕組みで、何もないところから火が生まれるのか。俺の頭では分からないが、とりあえず成功した。全ファンタジー好きの夢を叶えたぞ！

……それはそうとして、これ、どうしよう。この炎の塊、どうやって消せばいいんだ。

「……」

後先考えずにやってみるからこうなるんだよ。俺のバカ！

本気でどうしよう。水を出せばいいのか？ それとも消すイメージで引っ込められるのか？

このままでと近くのものに引火してしまふ。でもこんなに焦っているのは、水を出すのも消すのも上手く想像できない。

俺が頭を抱えていると、タイミングが良いのか悪いのかドアがガチャリと開く音が聞こえた。

「……これは」

ラディアは入り口で立ち尽くしたまま、目を見開いている。驚いていないで、これをどうにかしてくれ。

「……！ そのまま動かないでくださいね」

彼女は俺に近付くと、何やらボソボソと唱え始めた。火を見つめたまま言われたとおりじっとしていると、上から水が降ってきた。火は無事鎮火されたが、頭から水を被った俺は、つま先までずぶ濡れになった。助けてくれたのはありがたいけど、寒い。

「お怪我はありませんか!? 火傷は!?」

「お、僕は大丈夫だよ」

俺と言いかけて、慌てて僕に直す。

「よかった……あ、お風邪を引かれては大変です。今すぐお召し替えを！」

「自分でできますよ！」

急いでラディアを部屋の外へと追い出し、びちよびちよの服を着替え終わったところで、ちょうどドアがノックされた。

「エル様、旦那様からのお呼び出しです」

旦那様……ということとは、俺、いや『僕』の父親か。『僕』は父親と呼んでいた。

確か父親は厳格な人だし、もしかして魔法を使っちゃったことを怒られるのだろうか。

そんなことを考えながら長い廊下を歩いているうちに、とうとう書斎の前に着いてしまった。この中に入るのには気が重いけれど、仕方ない。

「失礼します……」

部屋に入ると、正面に立っていた金髪の男性と目が合った。父親——父のゼルンドだ。俺の中ではもちろん父親は父親ではないので、違和感がすごい。

書斎には他に栗色の髪をした女性、『僕』の記憶によると母様のアーネヴィ、金髪の子供と母様と同じく栗色の髪をした子供——兄様のルフェンドと、姉様のセイリンゼがいた。

そして全員、とてつもない美形だ。作りものかと思うほどに。なんだかキラキラしている落ち着かない。どうやらここに『僕』の家族が勢ぞろいしているようだ。いよいよ怒られる説、いや嚴重注意される説が濃厚になってきた。

「エル、魔法を使っただって？」

「えーっと……はい」
 父様が俺に問いかけてくる。

おそらくラディアが伝えたのだろう。ああ、やっぱり嚴重注意されるのか。

「すごいじゃないか！」

……ん？

「教えてもないのに魔法を使うなんて、エルは天才だな！」

「ええ、本当に！」

父様の言葉に同意しながら抱きついてきた母様に、頭を撫でまわされる。

他人に抱きつかれて平気だなんて普通なら考えられないが、やっぱり『僕』の記憶があるからか、全然不快じゃない。むしろ嬉しい。

それにしても、いいのか？ 他の兄妹の前で一人だけ褒めちぎるとか、喧嘩になるんじゃないか？ 現に二人、兄様と姉様は黙ったままだし。

二人の様子を横目でうかがっていると、うっかり目が合ってしまった。これは喧嘩が始まる感じか？ そうなんだな？

「エルはすごいね！ 流石僕の弟だよ！」

……これは大分予想外の反応だ。試しに、記憶の中の兄様を思い出してみる。

「エルは可愛いね〜！」

『本当ね、兄様！』

俺の顔を覗き込み、頬を緩ませながらそう言っている兄様と姉様。

寝がえりを打っただけでこの褒められようだ。

……なるほど、兄様と姉様はかなりのブラコンと。それならこの反応にも納得がいく。いつの記憶を引っぱり出してみても、可愛がられたり褒められたりしている思い出しかない。

「流石私の弟ね！」

僕は親バカとブラコンの家族に囲まれて、とても愛されていたらしい。全然可愛くないただのサラリーマンの『俺』が中に入ってしまったってなんだか申し訳ない。

『僕』の影響か、多少精神年齢が若返っている気がするが、それでも三歳の愛らしさには程遠いだろう。

この部屋にいる俺を除いた四人は、楽しそうに話している。というか、主に俺のことを褒め称えているだけだけど。

「エル、今からお庭に行かない？ 私も魔法を見せてほしいわ」

母様はそう言って、俺の頭を撫でまわすのをやめた。だがとき既に遅し、俺の髪はぐっちゃぐちゃのボサボサだ。

「はい、もちろん」

できれば早く一人になったが、これからこの人たちと暮らしていくのだから、そんなことは言っていられない。

俺は果たして、この世界で暮らしていけるのだろうか。

2

空中に生成した水を魔力で圧縮し、勢いをつけて銃弾のように放つ。補助のための詠唱も忘れずに。

『《アクアバレット》』

『ギヤツ！』

魔法で作った水の銃弾は見事命中し、兎形の魔物は鳴き声を上げて倒れた。

魔法の特訓の一環として、現在俺は家の近くにある通称『魔の森』にきている。今日は小型でも大型でも、魔物を千匹倒したら終了だ。

この悪魔のような特訓メニューは母様が考えたものなのだが、常識外れのスパルタである。百じゃなくて千だぞ。子供に課す特訓としてはあまりにもキツすぎる。

「エル、調子はどう？」

「……上々です」

大きな熊の魔物を引きずりながら、俺の近くへやってきた母様。相変わらず強い。

本当は疲れきっていると答えたかったところだが、これまでの経験上こう答えたほうがいいことは分かってきている。

まあ色々あり、あれからあつという間に二年が経った。そして転生した俺、エルティードは五歳になった。その二年間でこの世界について結構把握したし、大分こっちの理に慣れてきた気がする。背は伸び、俺も両親や兄弟と同様、例に漏れずそこそこの美形に……なれたような気がしないでもない。

まずこの世界には、あの少女も言っていたとおり魔法がある。元々俺がいた世界にはなかったものだ。仕組みはよくあるファンタジーな感じで、魔力を使って発動させるとかいうアレだ。個人によって魔力量は違うらしく、ラッキーなことに俺は多めのようだ。何かブツブツ言っていたし、あの白髪の少女がサービスしてくれたのかもしれない。

ちなみに魔力は休めば回復するけれど、回復する前に魔法を使いまくって空っぽになるに死ぬらしい。こわ。

ここまで散々魔力魔力言ったら、色んなものに宿っている魔力を感知できると思うじゃん？

それができないんだよ。なんと意外なことに空間にあるものしか感知できないらしい。

自分以外の人間の体内に宿っていたり、魔物に宿っている魔力、それからものに宿っている魔力はどれだけ強くとも微塵も分らないっばい。

例えば魔法発動後、空間に放出された魔力とか、元々空間に宿っている魔力とか。自分の魔力量とかは大体分かるので、うっかり死ぬなんてことはそうそうないみたいだけど。

属性もよくある感じで、おおまかに四属性プラス無属性に分かれている。

四属性はオーソドックスな火、地、風、水。無属性はそのどれにも属さない。分けようとするれば他にも細かい区分はあるらしいが、俺はそこまで詳しくないので知らん。ていうか割とどうでもいい。

あと、最初に魔法を使おうとしたとき不発だった理由も分かった。

魔法には呪文を唱えるよりもイメージが重要みたいだ。逆に言えばイメージさえできれば割となんでも使える。

もちろん魔法のことだけでなく、ちゃんと一般常識についても勉強した。

今俺たちが住んでいる国の名前はアドラード王国。大陸にある三つの国のうちの一つで、そこそこの大国だ。そして王国という名前のとおり、王族を頂点にした貴族制度で成り立っている。

俺の家は辺境伯という地位で、他国が襲ってきたときに国を守る役目があるため、国境近くに住んでいる。強くなければいけないので、結構な戦力を持った貴族がるらしいが、

俺は自分の住んでいる領地で兵士なんて見たことがない。そこどころがどうなっているのかは謎だ。

最初こそ不安だったが、せっかくなので俺はこの世界を全力で楽しむことにした。

まず手始めに俺の世界にはなかった憧れの魔法を極めることにしたところ……このとおりに母様による地獄の特訓が始まり、今に至る。我ながらこれをこなしている俺はかなりすごいと思う。

俺が厳しくしてくれと頼んだせいなんだが、それでもこれはキツイ。でもそのおかげで魔法は劇的に上達した。ついでに教えられた剣術も少しだけだが、できるようになった。

魔法を極めることにしたのは、楽しむためだけでなく魔物から自分の身を守るためでもある。

そう、この世界には白髪の少女も言っていたとおり魔物が存在するのだ。

魔物はたいてい森やら洞窟やら魔力が宿っている場所に発生するらしいが、詳しいことはよく分かっていない。あとなんか、増えすぎたり魔力が過剰だったりすると溢れ出てくるらしいので、定期的な討伐が必要みたいだ。魔物の動力源は魔力だと言われている。そのため本能的に魔力を持っている生きもの、つまり人間などを襲ってくるらしい。

「エルー！ 今何匹倒した？」

一緒に魔の森へ来ていた兄様が、楽しそうにこちらへ走ってくる。あ、足元に石が。

「ぶっ！」

声をかける間もなく兄様は思いきり躓き、顔面から地面へと突っ込んだ。今のはかなり痛かったはずだ。しかもこの辺りの土は硬いし、鼻の骨が折れていてもおかしくはない。

「大丈夫ですか、兄様」

慌てて兄様に駆け寄る。俺は石に躓かないよう気を付けながら。転び方がよかったのか、頬を少し擦りむいただけみたいだ。浅い傷だけど、せつかくだからこの間練習した魔法で治してみるか。失敗しても傷が治らないだけだし危険性はないからな。

兄様の傷を観察しながら魔法を発動させる。傷が治っていくイメージをしながら魔力を操作し、仕上げに詠唱を。今のは上手くいった気がする。

予感とおり頬の傷はすると塞がっていき、元の平らな状態へと戻った。

「もう回復魔法も使えるようになったのね！」

「うわっ！」

急に横から姉様が話しかけてきた。姉様、いつの間隣にいたんだ！

「エルはやっばりすごいよ！」

驚いて思わずあとずさると、今度は兄様にもぶつかると。最初はこの二人が兄と姉であることに違和感があったが、一緒に過ごしているうちにそれもなくなった。父様と母様に対しても同じだ。

「兄様、姉様、ありがとうございます」

この世界で新しい家族と上手くやっていけるかという心配は杞憂だったようだ。エルティードとしての記憶も手伝って、俺はすっかり家族の一員として、この世界で暮らしていた。

「それにしても、ついに明日は洗礼式ね。エルがどんな加護を授かるのか楽しみだわ」

そう、姉様の言うとおり明日は洗礼式が行われる。俺の住んでいる王国では五歳になると洗礼を受けることになっていて、そのときに神様からご加護を授かる。人によってその効果や強さは少しずつ違うらしい。面倒なことに、貴族は王都の指定された教会で洗礼を受けなければならない。しかもそのあと、王宮で開催されるパーティーにも出席しなければならないのだ。そこに出席する貴族にも挨拶しなきゃいけないし、面倒すぎる。

できることなら行きたくないけれど、決まりごとだから仕方ない。

ここから王都までは大分離れているので、この世界の主流な移動手段である馬車で移動していたら数週間以上かかってしまう。そこで魔法の出番だ。

翌日、転移魔法で教会へと移動すると、眩しいほどの白が目に入った。教会を一言で言い表すならば、まっつっつっしろ。たまに紫や緑、黒の装飾が入っているが、壁は一面真っ白だ。そして巨大。教会というより、大聖堂と言ったほうがいいんじゃないだろうか。

大きすぎる扉が開き、教会の中に入る。大理石の床を歩く音が、カツカツと響いた。豪華というわけではないが、中も一面真っ白だ。ずっと見てみると、目がちかちかしてきた。

話し声が聞こえたのでそっちを向くと、父様が白い服を着た女の人と話していた。

その人は急いだ様子で、奥の扉から出ていき、同じく白い服の神父っぽい人を連れてきた。

この教会、本当に白ばっかりだな。この世界では白が神聖な色みたいな感じなのかもしれない。

「それでは洗礼式を始めさせていただきます。私と一緒に、主に祈りを捧げてください」
神父らしき人は祭壇の前で手を組み、跪いた。俺もそれを真似する。

「偉大なる神よ、我に力を分け与えたまえ——この幼子に、祝福があらんことを」
目を閉じて祈っていると、何かが体に流れ込んでくる感じがした。

これが『加護を授かる』ということなのだろうか。なんだか転生したときの感じに似ている。

「——エル……エル！ もう終わったわよ」

「え？」

いつの間にか洗礼式は終わっていたようで、家族が心配そうに俺を囲んでいる。母様に

呼びかけられるまで何故か気付かなかった。

どうやら立ったまま意識が飛んでしまっていたらしい。

「特に体調が悪いとかはないか？ 稀に加護を授かる際に意識が飛んでしまうことがあるんだ」

ルフエンドとセイリンゼもなった、と父様は言った。兄弟三人ともなるなんて、それは果たして稀って言うのかどうか。

「エルはどんなご加護を授かったんだらうね？」

「わたしも気になるわ！」

俺と同じ経験をしたらしい兄様と姉様は、好きな人でも聞くようなノリで騒いでいる。

「えっと、加護ってどうやって確認するんですか？」

「強く念じると頭の中に浮かんでくるわ。他人に対して証明するときには、専用の魔道具を使ったりもするわね」

言われたとおり、俺の加護はなんなのか問いかけるように強く念じてみる。しばらくすると、頭の中に何か文字が浮かび上がった。

『創造神の加護・転生者』

……果たしてこれは、このまま伝えていいものだろうか。

『転生者』という言葉は、やっぱり俺がこの世界に転生したと関係あるんだらう。ま

あ今まで過ごしてきて、俺が転生者であることによって生活に支障しじょうが出るような影響はなかったし、これからも特にははずだ。

「創造神の加護、です」

色々考えた末、最後の部分を取り除いて伝えると、全員驚いたような顔をした。気を付けたつもりだったが何かまずかったらしい。

「すごいねエル!!」

「やっぱり自慢の弟だわ!」

兄様と姉様はいつものセリフを言いながら俺に抱きついてくるが、もう慣れたので問題なし。この反応を見るに、悪い方向というわけじゃなさそうだ。

「そういうご加護ってとっても珍しいのよ。普通は水神の加護とか、属性ごとのご加護が多いの」

母様が、俺の加護を聞いて皆が驚いていたわけを説明してくれた。

「そうなんですか。そういえば、父様や母様はどんなご加護なんですか?」

「私は魔法神の加護、父様は剣神の加護よ」

「僕は生命神の加護だよ」

「わたしは母様と同じ魔法神」

我先にと自分の加護を言い始める兄様と姉様。

全員属性じゃないじゃん、それも珍しくもなんともないだろ。むしろ属性のほうが珍しいぞ。

何故だかわいいわいと騒ぎ立てる家族たちとともに、歩いて王宮へと移動すると、既に人が沢山集まっていた。こんなに沢山の人がいるところに来るのは、転生してから初めてだろうか。

「エル、いいか。まずは練習したとおり、貴族の方々に挨拶して回る」

「はい、父様」

家で散々練習させられたから、言葉遣いからお辞儀の角度まで全て完璧だ。

「それから、変なやつに話しかけられたらすぐに逃げるんだ」

「分かりました」

流石に王宮にそんな不審者ふしんしやみたいなやつはいないと思うけどな。父様は心配性だ。

顔パスで衛兵に通してもらい、大広間へと入る。中にはさらに沢山の人がいた。入るときになんの確認もなかったし、誰か紛れ込んでも気付かないんじゃないか?

貴族が集まるというのに、結構その辺りがガバガバだ。衛兵は沢山配置されているけど。父様が不審者を心配するのも分からなくもない。

大広間の中は、まさに豪華絢爛ごうかけんらんといった様子だった。広間の豪華さもさることながら、貴族たちの身に纏うドレスや装飾品が下品なまでに豪華だ。

良家っぽい感じの貴族はシンブルながらも高級そうな礼服だが、いかにも成金って感じの人は、ギラギラした礼服を身に纏っている。やっぱりこの辺りにも人柄が出るのだろう。ところで、一つ気になることがある。

俺の家族、アドストラム家が来た途端、すごくざわつき出したんだが。

チラチラといくつか視線も感じる。

俺の家族が美形だからなのか、はたまた悪い噂でもあるのか。前者ならず、すごい平和なだけでなあー。

ちらほらと、「アドストラム家が来たぞ！」とかいう声が聞こえるんですね。困ったことに。

「静粛に！」

威厳のある声が大広間に響き、壇上に立っている国王陛下に注目が集まる。

髭がふっさふさのおじいさんを勝手にイメージしていたが、普通に若かった。父様と同じぐらいだ。

「今日は、五歳になる子供たちが集まっているであろう。偉大なる神より祝福を賜りし子供たちの、新たな門出を祝おう！」

陛下がその言葉を言い終わるとともに、広間に歓声が響いた。

さて、今から俺は挨拶をして回らないといけないのか。面倒臭いけど、せっかく練習し

たしな。

家族と一緒に、大広間の貴族に挨拶していく。堅苦しい定型文を述べて、お辞儀をして、の繰り返しだ。

いちいち名乗られるし俺も名乗ったけど、誰一人として名前を覚えていない。きっと相手も同じことだろう。

ひととおり挨拶が済んだ頃、使用人らしき人が父様に何かを伝えにきた。

「エル、陛下がお呼びだそうです」

「……いや、なんで?」

俺、まだ何もやってないけど。

なんでお国のトップに呼び出されるんだ。

俺がフリーズしていると、父様がものすごく長いため息をついた。俺の予想、約二分。すごい肺活量だな。

「なんでかは分からない。とりあえず行こうか、エル」

そう言って、父様は大広間の出口へと向かっていく。母様と兄様、姉様もついてくるように、俺と一緒にそのあとに続く。

「まったく、あの馬鹿王……!」

下手したら不敬罪で殺されそうな単語が聞こえたのは、きつと気のせいだ。そういうこ

とにしておこう。

長い廊下をとおり、陛下がいる部屋へと向かう。

「おい、来たぞ。この馬鹿王！」

父様は部屋に着くなり勢いよく扉を開け、ずかずかと部屋の中に入っていく。これは確実にアウト。本人の前でアウトワードを口にしたうえ、この態度は絶対によろしくない。

不安になって母様のほうをうかがってみるが、焦った様子もなく普通だった。続いて部屋の中にいる陛下の様子をうかがうけれど、こちらも普通。

「父様。その方、国王陛下ですよね？」

「ああ、そうだが？」

父様に不思議そうな顔をされる。まあ王冠被ってるもんな。

「陛下は父様の弟君なのよ」

そういうことか。まあ兄弟だろうと許される言葉ではない気がするが、母様の説明で少しは納得できた。

それはそうと、世襲制なら普通、長男が家を継ぐはずだよな？ 父様が辞退したんだろ

うか。

「君がエル君かい？ 初めまして、国王のヴァルド・ルイズ・アドラードだ。よろしくね」

「……えっと、エルティード・レシス・アドストラムと申します」

さっきまでと同じように、名乗ったあとにお辞儀をする。俺の名前は知っているようだが、一応貴族のマナーとして。

「……えっと、君、本当に男の子？」

「は？？」

陛下から聞き捨てならない言葉が飛んでくる。

俺は真正正銘男だが。確かに多少女顔だけど、そんな風に聞くことないだろ。まだ幼いから男女の見分けが難しいのも分かるが、俺の名前完全に男ですが！！

「ああ、怒らないでくれよ。あまりに君が美しかったものだからね」

こいつ、さては容姿を褒めることでごまかそうとしてやがるな。俺がこっそり睨みつけると、陛下は困ったような作り笑いを浮かべた。なんかさっきの威厳がある陛下と、随分キャラが違う気がする。口調だけでなく、雰囲気まで違ってまるで別人のようだ。

「さて、本題に入ろうか。君、すごい魔力を持ってるね」

「は、はあ……」

「その髪色、気にしていませんか？ ほら、君だけ真っ白」

もちろん気にしていませんとも。

父様と兄様は金髪、母様と姉様は茶髪なのに、俺の髪だけ本当に真っ白。俺としてはあ

まり好きではないけれど、皆はこの髪のことを褒めてくれる。

あまり人に会ったことがないから分からないけれど、もしかして真っ白は珍しいのだろうか。この世界では派手な髪色が多い気がするし普通かと思っていた。

「それね、魔力量が多すぎて色が抜けてるんだよ。僕も噂でしか聞いたことないけど。初めて見たよ、そんな髪色」

「……そうなんですか？」

「あくまで噂だから、実際どうかは知らないけどね」

そう言って陛下はふざけたように笑う。一体この人は何が言いたいのだろうか。

「その紫色の目も珍しいよね」

陛下は俺の顔を覗き込んで、瞳の色を見ている。どうやらこの人はパーソナルスペースがバグっているらしい。異常に距離が近い。

どうすればいいのか考えていると、父様が陛下を引き剥がしてくれた。ナイスプレイ！「アーネ、エルたちを連れて戻ってくれ」

父様がそう言うなり、俺たちは母様に連れられて退室した。

それにしても、陛下は何が言いたかったのだろう。人の髪色と瞳の色なんて、俺はどうでもいいけど。少し気になるが、まあ気にしない方向でいこう。

エルたちが部屋を出ていったのを見計らって、部屋に残ったゼルンドがヴァルドに向かって口を開く。

「何が言いたいんだ、ヴァルド」

「兄上だって分かっているだろう？ 王家の伝承によると、純白の髪に紫色の瞳は、神より遣わされし聖女の証。戦争は終わり、作物は実り、民に笑顔が満ち溢れるだろう、とある」

「……」

「エル君に同様の特徴があるとはいえ、伝承は所詮伝承さ。それに、彼はそれこそ聖女のように美しいけれど、確かに男なんだろう？ 聖『女』じゃない」

「……そうだな」

「それを伝えたかったただだよ。いきなり呼び出して申し訳ない」

「……少し話がすぎたな。もう戻るよ。またな、ヴァルド」

「ああ。またね、兄上」

「ぶえっくしょん!!」

「エル、大丈夫？」

ハンカチが間に合わず、思いきりくしゃみをしてしまった。誰かが俺の噂をしているの

だろうかと、とベタなことを考えてみる。それにしても暇だ。

改めて大広間を見渡してみると、ある一点に、何人もの令嬢が集まっているのを見た。

その中心には先ほど挨拶したうちの一人、王子殿下がいた。陛下が俺の叔父ということ
が判明したので、王子殿下は俺のいとこになる。歳はおおよそ俺と同じぐらいだろうかと
だというのに妙に大人びた振る舞いをしているように感じる。

父様を除く家族三人はそれぞれ誰かと話しているようなので、俺は壁際で存在感を消す。
話しかけられたらどう対応すればいいのか分からないし、こうしているのが一番だ。

遠くから令嬢たちに囲まれた王子殿下を眺めてみる。ものすごく大変そうだ。俺は王子
じゃなくてよかった。しばらくぼーっとして広間の人間観察をしていると、ある異変に俺
は気が付いた。何故か王子が近づいてきてる気がする。いや、気のせいじゃなく確実に。

「えっと、何か御用でしょうか……?」

「エルティード様でしたよね。こんな壁際ではなく、こちらにいらっしゃったらいかがで
すか?」

俺の家族と同じく、キラキラとした顔面が近づいてくる。この世界ではこれがスタン
ダードなんだろうか。

「え、えーと……遠慮させていただきます」

俺はなんとか貴族スマイルを保ったまま、そう返した。

王子殿下と一緒にいたら、令嬢に囲まれること間違いなしだ。そんな面倒なところに自
ら飛び込んでいくほど俺は馬鹿じゃない。

「そんなことを言わずに。せっかくだとこなんですから、少しお話ししましょうよ」

王子殿下の押しが強いこと強いこと。あれよあれよという間に、俺は人混みの中心へと
引き込まれてしまった。

「で、殿下……」

「僕のことルシアと呼んでください」

「……分かりました。ではルシア様、手を離していただけないでしょうか」

俺の手は王子殿下改めルシアに、がっしりと掴まれている。何が嬉しくて他人、しかも
男と手を繋ぐなきやいけないんだ。

「嫌です。だって離れたら、すぐに逃げるでしょう?」

「はは……」

分かっているなら離してくれよ。心の中ではそう思ったが、俺は貴族スマイルを忘れない。
えらいぞ、俺。

「エルティード様は美しいですね」

「はい?」

立ち読みサンプル はここまで